

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 國學院大學図書館所蔵「羅生門」の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 山本, 岳史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00002374">https://doi.org/10.57529/00002374</a>

# 國學院大學図書館所蔵『羅生門』の解題と翻刻

針 本 正 行

山 本 岳 史

## はじめに

國學院大學図書館に「羅生門」という物語絵巻が収蔵されている。「羅生門」の物語絵巻には、京都国立博物館所蔵「羅しやうもん」(絵巻二軸)・佛敎大學図書館所蔵「羅生門」(絵巻二軸)・井田等氏所蔵「羅生門」(絵巻二軸)・国文学研究資料館所蔵「羅生門物語」(絵巻二軸)・東洋大學図書館所蔵(絵巻二軸)・天理大學図書館所蔵「羅生門絵詞」、冊子本として、静嘉堂文庫所蔵本・東洋大學図書館所蔵本などが確認されている。すでに、佛敎大學本・井田本・国文学研究資料館所蔵「羅生門」の全文翻刻、佛敎大學図書館所蔵本・井田等氏所蔵本・国文学研究資料館所蔵本・東洋大學図書館所蔵本(絵巻二軸)の本文との対校、國學院大學図書館所蔵本の挿絵の構図及び詞書書写者などの諸問題についての検証を通して、國學院本の特徴を明らかにしたい。なお、翻刻にあたっては山本岳史氏の協力を得た。

## 【書誌】

全二卷。料紙は鳥の子、下絵は金泥草花文様。題箋(縦一五・九糎×横三・五糎)には、「羅生門 上(下)」とある。紙高は凡そ三三・一糎。上巻は長さ凡そ一二・七七米、挿絵は八図。下巻は長さ凡そ一四・七三米、挿絵は八図。

## 一、「羅生門」の本文

本章では、國學院大學図書館所蔵「羅生門」(略号「國」)の本文と、佛敎大學図書館所蔵「羅生門」(略号「佛」)、井田等氏所蔵「羅生門」(略号「井」)、国文学研究資料館所蔵「羅生門物語」(略号「資」)、東洋大學図書館所蔵「羅生門」(絵巻二軸 略号「東」)のそれぞれの冒頭本文、及び巻末本文とを対校することにより、國學院大學図書館所蔵本の本文の特徴について述べてみたい。

## (一)「羅生門」冒頭の本文

本節では、國學院大學図書館所蔵「羅生門」の本文と、佛敎大學図書館所蔵本、井田等氏所蔵本、国文学研究資料館所蔵本、東洋大學図書館所蔵本の冒頭本を対校することにより、國學院大學図書館所蔵本の本文の特徴について述べてみたい。

- (1)國  そもく〜にん王・五十六代のみかど清和天皇せいわてんわう・の御まこたゝのまんちうと申・はちからは世に聞・え・
- (1)佛  そもく〜にんわう五十六代のみかどせいわ天わうの御まこたゝのまんちうと申・はちから・世に聞・え・
- (1)井  そもく〜人・皇・五十六代のみかど清・和天わうの御まこ多田の満・仲・と申侍るはちからは世に・こえ・
- (1)資  そもく〜人・わう五十六代のみかどせいわ天わうの御まこ多田のまんちうと申侍るはちから・よのつねにこえて

- (1) 東 抑・人・皇・五十六代のみかと清・和天皇・の御孫・多田の満・仲・と申奉るは力・世の常・にこえ・
- (2) 國 きりやうたくましくしてぶようのきこえありければ・日本武士・のずい一なり・とてはしめてげんしの
- (2) 佛 きりやうたくましくしてぶようの聞・え有・ければこれ日本ふし・のすい一なり・とてはしめてけんしの
- (2) 井 きりやうたくましくしてぶようのきこえありければ是・日本ふし・のすい一なり・とてはしめて源・氏の
- (2) 資 きりやうたくましくしてぶようのきこえありければ是・日本ふしやうのすい一たるへしとてはしめてけんしの
- (2) 東 器量・たくましくして武勇・の聞・えありければ是・日本武將・の随・一なり・とてはしめて源・氏の
- (3) 國 しやうを給はりくにくのち・らんをしつめ・給ふかその御子津の・かみよりみつあとをつきはんしやう
- (3) 佛 しやうを給はりくにくのち・らんをしつめ・給ふかその御子津の・かみよりみつあとをつきはんしやう
- (3) 井 しやうを給はりくにくのち・らんをしつめ・給ふかその御子津の・かみよりみつあとをつきはんしやう
- (3) 資 しやうを給はりくにくのちいらんをしつめさせ給ふ・その子せつつかみ・
- (3) 東 姓・を給はり國々・の治亂・を鎮・め・給ふ・その子撰津・の守・
- (4) 國 やうしたまふときにあたりてみやこにふしきなる事共・
- (4) 佛 やうしたまふ時・にあたつて都・にふしきなる事共・
- (4) 井 やうしたまふ時・にあたつてみやこにふしきの・事とも・
- (4) 資 らいくはうのときにあたつて世・にふしきなる事ともおほかりけるそのころ宮こに人のうする事ありて
- (4) 東 頼光・の時・にあたつて都・に不思議なる事ども・
- (5) 國 大しんくきやうの御むすめ・土民・百姓・のむすめ・をきらはすみめかたちいつくしき
- (5) 佛 大臣・公卿・のむすめ・土民・百姓・のむすめ・をきらはすみめかたちいつくしき

- (5) 井 大臣・くきやうの御むすめ・．．．土民・百姓・の娘・共をきはす見めかたちのいつくしき
- (5) 資 大しんくきやうのひめ君ともいはす又はとみん百しやうのむすめにいたるまでみめかたちのいつくしき
- (5) 東 大臣・公卿・の女・．．．土民・百姓・の女・．．．をきはす眉目かたちの美・しき
- (6) 國 ．．．．．はいつくともなく見えすうせ・けるとてうれへにしつむもの・．．．おほかりけり
- (6) 佛 ．．．．．はいつくともなく・うせ・けるとてうれへにしつむもの・．．．おほかりけり
- (6) 井 ．．．．．はいつくと・なく見えすうせ・けるとてうれへにしつむもの・．．．おほかりけり
- (6) 資 女はうとなれは行系もしらす・．．うせ・．．てうれへにしつむたかきいやしきによらすおほかりける
- (6) 東 ．．．．．は．．．．．見えすうせ・けるとて憂・へに沈・む者・．．．多・かりける
- (7) 國 はしめひとりふたりのほとはわりなく人にそゝなはされけるにやあるひはおやのいさめもうとましく・かくれ
- (7) 佛 はしめひとりふたりのほとはわりなく人にそゝなはされけるにやあるひはおやのいさめもうとましく・かくれ
- (7) 井 はしめひとりふたりのほとはわりなく人にそゝなはされけるにやあるひはおやのいさめもうとましく・かくれ
- (7) 資 はしめひとりふたりのほとはわりなき人にそゝのかされ・．．あるひはおやのいさめもうとましく・かくれ
- (7) 東 はしめひとりふたりの程・はわりなき人にそゝのかされ・．．親・の諫・めもうとましく・かくれ
- (8) 國 うせぬ・．．とおもひしかこゝにもみえすかしこにもうせぬといふ・．．ほと・こそあれすてに洛・中・
- (8) 佛 うせぬ・．．とおもひしかこゝにもみえすかしこにもうせぬといふ・．．ほとにこそあれすてにらくちう
- (8) 井 うせぬ・．．と思・ひしかこゝにもみえすかしこにもうせぬといふ・．．ほとにこそあれすてに洛・中・
- (8) 資 しのふにやと思・ひしにこゝにもみえすかしこにもうせぬと世にひろく聞ゆるほとにこそあれすてに洛・中・
- (8) 東 忍・ふにやと思・ひしにこゝにもみえすかしこにも失せぬといふ・．．こそあれすてに洛・中・

- (9) 國 に百余人にをよへりこれたゝ事・にあらすとしてかみ一人よりしもばんみにいたるまでわか身ひとりの・・・
- (9) 佛 に百よ人にをよへりこれたゝ事・にあらすとしてかみ一人より下・はんんにいたるまでわか身ひとりの・・・
- (9) 井 に百よ人にをよへりこれたゝことにあらすとして上・一人より下・万・みんなにいたるまでわか身ひとりの・・・
- (9) 資 に百よ人にをよへりこれたゝことにあらすとしてかみ一人より下・万・みんなにいたるまでわか身ひとりのやうに
- (9) 東 に百餘人に及・べりこれたゝごとにあらすとしてかみ一人より下・萬・民・に至・るまで我・身ひとりの・・・
- (10) 國 なけきとなれり・・・いかさまこれは人のしはさにあらすとして陰・陽・のはかせをめしてうら
- (10) 佛 なけきとなれり・・・いかさまこれは人のしわざにあらすとしておんやうのはかせをめしてうら
- (10) 井 なけきとなれり・・・いかさまこれは人のしわざにあらすとしておんやうのはかせをめしてうら
- (10) 資 なけき・・・にしつまずといふ事なしいかさまこれは人のしわざにあらすとしてをんやうのはかせをめしてうら
- (10) 東 歎・きとなれり・・・いかさまこれは人のしわざにあらじとして陰・陽・の博士・を召して占・
- (11) 國 なは・せ給ふ所にうらかたのおもてかんもんをもつていはく都・の・にし丹波・の國・より・・・
- (11) 佛 なは・せ給ふ處にうらかたのおもてかんもんのもつていわくみやこの・にしたんはのくにより・・・
- (11) 井 なは・せ給ふ所にうらかたのおもてかんもんのもつていはく宮・この・にしたんはのくにより・・・
- (11) 資 なはさせ給ふ・に・・・みやこよりにしたんはのくにゝ・・・
- (11) 東 なわ・せ給ふ・に・・・みやこよりにしたんはの國・大江山といふ所に鬼
- (12) 國 ・・・わさはひをなすつるには世をかたふけ王・位をおかさんとするよしかんかへければ
- (12) 佛 ・・・わさはひをなすつるには世をかたふけわうるををかさんとするよしかんかへければ
- (12) 井 ・・・わさはひをなすつるには世をかたふけ王・位をおかさんとするよしかんかへければ

- (12) 資 あるおにおにのしわさなり・．．．つるには世をかたふけわうるをおかしたてまつらんとすると申せば
- (12) 東 人の棲んでかくの如くの・わざはひをなしつるには世をかたぶけ皇位・を犯・さんとする由・勸・へければ
- (13) 國 いかゝして・．．かれらをほろぼさんと公卿・せんぎありけるにとかくせつ津のかみみなもとの頼・光・
- (13) 佛 いかゝして・．．かれらをほろぼさんとくきやうせんきありけるにとかくせつ津のかみみなもとのらいくわう
- (13) 井 いかゝして・．．かれらをほろぼさんとくきやうせんきありけるにとかくせつつのかみ源・．．の頼・光・
- (13) 資 いかゝして・そのきしんをほろぼさんとくきやうせんきありけるにとかくせつつのかみみなもとのらいくはう
- (13) 東 いかゝしてか・．．滅・ぼさんと公卿・僉・議ありけるがとかく攝津・の守・源・．．の頼・光・
- (14) 國 をめしてかれに仰・てたいぢあれかしと・そうもん申されければみかとけにもとおほしめしすなはちいそき
- (14) 佛 をめしてかれにおほせてたいちあれかしと・そうもん申されければみかとけにもとおほしめしすなはちいそき
- (14) 井 をめしてかれにおほせてたいちあれかしと・そうもん申されければみかとけにもとおほしめしすなはちいそき
- (14) 資 ・．．におほせてたいちあるへきよしそうもん申されければみかとけにもとおほしめしすなはち・．．
- (14) 東 ・．．に仰・せて退治・あれかしと・奏・聞・申されればみかどげにもとおほしめしすなはち・．．
- (15) 國 らいくはうをめし・てせんしを・なし下されける
- (15) 佛 頼・光・をめし・てせんしを・なし下さる・
- (15) 井 らいくはうをめし・て宣・旨を・なし下されける
- (15) 資 らいくはうをめされ・せんしをそなし下されける
- (15) 東 頼・光・を召されて宣・旨を・下されけり

右の本文校合を確認すると、(1)「國」・「佛」が「世に聞え」とあるところ、「資」・「東」は「よのつねにこえ」・「世





- (2) 國 つるにたちのきつさき五寸・はかりくひをつてくちにふくみなからはんしはかりおとりあかり・・・て・
- (2) 佛 つるに太刀のきつさき五寸・はかりくひおつてくちにふくみなからはんしはかりおとりあかり・・・て・
- (2) 井 つるに太刀のきつさき五寸・はかりくひきつてくちにふくみなから半時・はかりおとりあかり・・・て・
- (2) 資 つるに太刀のきつさき五寸はかりくひきつてくちにふくみなからはんしはかりおとりあかりく・・・ほえ
- (2) 東 つるに太刀のきつさき五寸・ばかり食ひ切つて口・に含・みなから半時・ばかり踊・り上がり・・・吠へ
- (3) 國 いかりける・つな・・・はこしのさしそへするりとぬき・・・すきまもなくきり給・へは・
- (3) 佛 いかりける・つな・・・もこしのさしそへするりとぬきてさか手にとり・すきまもなくきり給・へは・
- (3) 井 いかりける・つな・・・こしのかたな・をぬき・もちてさか手にとり・すきまもなくきりけれ・は・
- (3) 資 いかりけるからいくわう・・・太刀を・・・さか手にとりてすきまもなくきりたまへは・
- (3) 東 いかりけるが頼・光・・・太刀を・・・逆・手に取り・隙・間もなく斬り給・へはつるに
- (4) 國 大地にをちてつるにむなしくなる・・・これよりわたなへたうのやかたにははふ
- (4) 佛 大地におちてつるにむなしくなる・・・おそろしかりしこと・もなりこれよりわたなへたうのやかたにははふ
- (4) 井 大地におちてつるにむなしく成りにけりおそろしかりし事・共・なり是・より渡・辺・とうのやかたにははふ
- (4) 資 大地におちて・・・むなしくなる・・・おそろしかりしありさまなりこれよりわたなへ・・・のやかたにははふ
- (4) 東 ・地に落ちて・・・むなしくなる・・・恐・ろしかりし事・どもなり是・より渡・邊・臺・の屋形・には破風
- (5) 國 をせさる・と・申なり・・・その・ちかのひけきをあらため・鬼・きりとそ名つけ・るされとも
- (5) 佛 をせさる・とはこのときよりはしまりけるそののちかのひけきをあらため・おにきりとそなつけ・れされとも
- (5) 井 をせさる・とはこの時・よりはしまりけるそののちかのひけきをあらため・おにきりとそなつけ・れされとも

- (5) 資 をうたさる事はこのいはれなり．．．．そののちかのひけきりをあらため・おにきりとそなつけ．．たれとも
- (5) 東 せざる・とは此・いはれなり．．．．その後・かの鬚・切・を改．．めて鬼・切・と・名づけけれ．．ども
- (6) 國 きつさきのをれぬれは何・のやうにかたつへきとおほせけれし．．とも．．つるきのゐとく・にて．．．．
- (6) 佛 きつさき・おれぬれはなにのやうにかたつへきとおほせけれしかれともこのつるきのゐとく・にてこそおほくの
- (6) 井 きつさき・おれぬれは何・のやうにか立・へきと仰．．けれしかれともこのつるきのゐとく・にてこそおほくの
- (6) 資 きつさき・おれぬれはなにのやうにかたつへき．．．．このつるきのゐくはうに．．こそおほくの
- (6) 東 きつさき・折れぬれば何・の用・にかたつへき．．．．此・劍・の威光．．にてこそ多・くの
- (7) 國 ．．．．世中□つかにおきけりける此つるきのおれぬるにつき．．．．
- (7) 佛 おにともをしたかへ．．て世中．．．．せいひつし・けれいまより後の
- (7) 井 おにともをしたかへ．．て．．．．せいひつに成けれ今・より後・
- (7) 資 おに・をもしたかへつれ．．．．いまよりのち
- (7) 東 鬼・をも従．．へつれ．．．．今・より後・
- (8) 國 ．．．．いかさまそのしるしのなからんや
- (8) 佛 世・中いかゝあらんすらんとなけき給ひしか．．これてんかのめいけんなれはいかさまそのしるしのなからんや
- (8) 井 世・中いかゝあらんすらんとなけき給ひしかとも是・天・下のめいけんなれはいかさまそのしるしのなからんや
- (8) 資 世の中いかゝあらんすらんとなけき給ひしか．．天・下のめいけんなれはいかさまそのしるしのなからんや
- (8) 東 世・中いかゝあらんすらんと歎・き給ひしが．．これ天・下の名・劍・なればいかさま其・しるしのなからんや
- (9) 國 とてその比・しゆけん第・一の聞・えありしよかはのそうつかくれん．．．．をしやうしたてまつり給ひて

- (9)佛 とてそのころしゆけん第一の聞・えありしよかはのそうつかくれん．．．をしやうしたてまつり給ひて
- (9)井 とて其・ころしゆけん第一のきこえありし横川・のそうつかくれん．．．をしやうしたてまつり給ひて
- (9)資 とてそのころしゆけんたい一の．．．よかはのそうつかくれんといひしをしやうしたてまつり．．．
- (9)東 とてそのころ修・験・第一の．．．横川・の．．．都覺・蓮．．．を請．．．じ奉．．．り．．．
- (10)國 たんしやうにこのたちをたてをき・しめをひきて七日のかちかちし給ひければきつさき五寸をれたりけるつるき
- (10)佛 たんしやうにこのたちをたてをき・しめをひき・七日・かち．．．し給ひければきつさき五寸おれたりけるけん・
- (10)井 たん上．．．にこの太刀をたておき・しめを引き・七日・かち．．．し給ひければきつさき五寸おれたりける劔・
- (10)資 たん上．．．にこの太刀をたて七へのしめを引き・七日・かち．．．し給ひければきつさき五寸おれたりし・けん・
- (10)東 壇・上．．．に此・太刀を立て．．．注連をひき・七日・加持．．．し給ひければきつさき五寸折れたりける劔・
- (11)國 にてんしやうよりくりからおり．．．てきつさき・口・にふくみつきければたちまちにもとのことく・一ふりの
- (11)佛 にてんしやうよりくりからおり．．．てきつさき・口・にふくみつきければたちまちにもとのことく・一ふりの
- (11)井 にてんしやうよりくりからおり．．．てきつさき・口・にふくみ．．．ければたちまちにもとのことくにきつさき
- (11)資 にてんしやうよりくりからおりかゝりてきつさきをくちにくくとみえけるかたちまちにもとのことく．．．
- (11)東 に天・井．．．より俱利伽羅おりかゝり・きつさきを口・に含・み．．．ければ忽．．．ちにもとの如・く．．．
- (12)國 太刀となるふしきなりし事ともなり扱．．．このふたつのつるきけんしの家につたはりてうてきをほろほし
- (12)佛 太刀となるふしきなりし事ともなりさて．．．このふたつのつるき源・氏の家につたはりてうてきをほろほし
- (12)井 おひにけりふしきなりし事共・なりさて．．．このふたつのつるき源・氏の家につたはりてうてきをほろほし
- (12)資 おひ出にけり．．．さるほとにこの二・つのつるきけんしの家につたはりてうてきをほろほし

- (12) 東 生ひ出にけり・・・・・此・二・つの劔・源・氏の家に傳・はり朝・敵・を滅・ぼし
- (13) 國 なひかぬ草・木もなかりける扱・も・くにくのきしんもしつまり人のゆきゝのかよひして・・・・
- (13) 佛 なひかぬ草・木もなかりけりさても・くにくのきしんもしつまり人のゆきゝのかよひして・・・・
- (13) 井 なひかぬくさ木もなかりけりさても・くにくのきしんもしつまり人のゆきゝもたやすくて・・・・
- (13) 資 なひかぬくさ木もなかりけりさても・くにくのきしんもしつまり人のゆきゝもたやすくて・・・・
- (13) 東 靡・かぬ草・木もなかりけりさてこそ國・々・の鬼神・もしづまり人の通・ひもたやすくなり六十餘州統一して
- (14) 國 としくの・みつきのものはこふにそのわつらひもなくこくと・・・・はんしやうひころにかはり
- (14) 佛 としくの人のみつきのものはこふにそのわつらひもなくこくと・はんみん・・・・
- (14) 井 としくの・みつきの物・をはこふにそのわつらひもなくこくと・万・みん・・・・
- (14) 資 年・くの・みつきのものはこふに・わつらひもなくこくと・・・・はんしやう日ころにかはり
- (14) 東 年・々の・貢・物・を運・ぶに・わづらひ・なく國・土の・・・・繁・昌・日ごろに變・り
- (15) 國 ・・・・めてたかりし御よとかやこれ・・・・らくはうのふりやく①②
- (15) 佛 よろこひめてたかりし御世とかやこれしかしなから頼・光・のふりやく③④
- (15) 井 よろこひめてたかりし御代とかやこれしかしなかららくわうのふりやく⑤⑥
- (15) 資 ・・・・めてたかりし御代とかやこれひとへに・らくわうのふりやく⑦⑧
- (15) 東 ・・・・めでたかりし御代とかやこれ・・・・頼・光・の武勇・⑨⑩
- (16) 國 ①もろこしにとつてこれをいははんくわいちやうりやうかいきほひにもこへ・はんさうはんれいかはかり事・
- (16) 資 ⑦もろこしにとつては・・・・はんくわいちやうりやうかいきほひにもこえ・はんさうはんれいかはかりこと

- (16) 東 ⑨唐・土・にとつてこれをいはば樊・噲・張・良・が勢・にもまさり范・增・范・蠡・がはかりごと
- (17) 國 ②にもすき・まのあたりに・たひくきしんをしたかへける心のうちこそためしすくなきしたいなれ
- (17) 資 ⑧にもすきてまのあたりにてたひくきしんをしたかへ給ふ心のうちこそためしすくなきしたいなれ
- (17) 東 ⑩にもこえ・まのあたりにて度・々・鬼神・を従・へし・心のうちこそためし少・なき次第・武將なりけり
- (18) 佛 ③のほとそのうへ四人の人くほうしやうたくひなきつはもの・つきそひたまひたるゆへとかやらいくはうを
- (18) 井 ⑤のほとそのうへ四人の人くほうしやうひるいなきつはもの共つきそひ給・ひし・ゆへとかやらいくはうを
- (19) 佛 ④はしめとして残り五人の人くもおもひおもひにちぎやうしてふつきとさかへ給・ひけり
- (19) 井 ⑥はしめとして残り五人の人くもそれに・知行・給て・さかへ給ふそめてたき

右の本文校合を確認すると、(1)「國」・「佛」・「井」が「其後」「そののち」・「ちつともさはかす太刀ふりあけてきりはらふ」とあるところ、「資」・「東」の本文は無い。(3)「國」・「佛」が「するりとぬき」、「井」が「ぬきもちて」とあるところ、「資」・「東」の本文は無い。(6)「國」が「とおほせけれしとも」、「佛」が「とおほせけれしかれとも」、「井」が「とおほせけれしかれとも」とあるところも、「資」・「東」の本文は無し。(9)「國」・「資」が「聞えありし」、「井」が「聞こえありし」とあるところ、「資」・「東」の本文は無い。(12)「國」・「佛」・「井」が「ふしきなりし事ともなり」とあるところ、「資」・「東」の本文は無い。これら、(1)・(3)・(6)・(9)・(12)からすると、國學院大學図書館所蔵「羅生門」下巻末部の本文は、佛敎大學図書館所蔵本・井田等氏所蔵本と近似性があるといえる。しかし、(14)「國」が「はんしやうひころにかはり」、「資」が「はんしやう日ころにかはり」、「東」が「繁昌日ころに變り」とあるところ、「佛」・「井」の本文は無いので、この箇所は、本文系統の問題ではなく、書写過程での誤脱といえるであろう。

また、(4)「佛」・「井」・「資」・「東」が「おそ(恐)ろしかりことゝもなり」とあるところ、「國」は無く、(8)「佛」・「井」・

「資」・「東」が「世中いかゝあらんすらんとなけき給ひしか(とも)これてんかのめいけんなれは」とあるところも、「國」は無く、(7)「國」が「つかにおきけるけりけるところ此つるきのおれぬるにつき」とるあと、「佛」・「井」・「資」・「東」の本文は無いので、当該本文は、國學院大學図書館所蔵本の独自本文であるといえるであろう。なお、「東」の「六十餘州統一して」は、「國」・「佛」・「井」・「資」には無く、東洋大学図書館所蔵本の独自本文である。さらに、(16)・(17)「國」・「資」・「東」に、「もろこしにとつてこれをいはははんくわいちやうりやうかいきほひにもこへはんさうはんれいかはかり事にもすきまのあたりにたひくきしんをしたかへける心のうちこそためしすくなきしたい」とあるように、「國」・「資」・「東」は、源頼光が源氏の頭領として優れた武勇を発揮することを賞賛する叙述になっている。一方、(18)・(19)に、「四人の人くほうしやうたくひなきつはものつきそひたまひたるゆへとかやらいくほうをはしめとして残り五人の人くもおもひおもひにちぎやうしてふつきとさかへ給ひけり」「四人の人くほうしやうひるいなきつはもの共つきそひ給ひしゆへとかやらいくほうをはしめとして残る五人の人くもそれに知行給てさかへ給ふそめてたき」とあるように、「佛」・「井」は、頼光をはじめ四天王が知行を得て至福を得て繁栄したことを叙述している。

以上から國學院大學図書館所蔵『羅生門』下巻末尾の本文は、佛敎大学図書館所蔵本・井田等氏所蔵本と近似性があるといえるものの、物語の終焉では、国文学研究資料館所蔵本・東洋大学図書館所蔵本と同じく、源氏一族の武門の誉れを称揚するものとなっている。

## 二、『羅生門』の挿絵の構図

本節では、國大本『羅生門』上巻及び下巻の挿絵の構図について、本文との関係から述べてみたい。<sup>3)</sup>

## (一) 上巻の挿絵(第一〜八図)の構図

第一図は、頼光ら六人が、大江山の鬼神を退治したことを天皇に奏上する場面。階の下で奏上しているのが源頼光、右手前に、鬼神を退治した、綱・公時・貞光・季武ら四天王と藤原保昌が控えている。天皇は御簾の中で座し、姿は見えない。廂には、五人の公卿が居並ぶ。第二図は、頼光が、渡辺綱たち五人を招いて宴を開き、保昌が羅生門に棲む鬼神のことを語る場面。画面左は頼光、画面手前に座っているのが綱、奥の左の武士が保昌か。部屋の奥には水墨画を描いた襖障子が見える。部屋の中と廊下にそれぞれ二人の奉仕する者が描かれている。第三図は、保昌の語る羅生門の鬼神の存在の真偽をただそうと、綱が証拠の印の高札を持って頼光邸を出ようとする場面。頼光が部屋の奥に座っている。綱は羅生門へ行った証拠の高札を持って廊下に立っている。第四図は、綱が羅生門の前に到着した場面。綱は甲冑に身を固めて馬に騎乗している。羅生門の屋根の上には黒雲がかかり、雲からは光線が出ていて、鬼神の棲む様を暗示している。第五図は、頼光らが綱を追いかけて八条の坊門に到着した場面。画面左の桜の木の上方から黒雲がかかり、鬼神のいることを暗示する光線が出ている。騎乗する五人の内、二人は背を向け、三人は顔を見せ、不気味な黒雲に武士たちが混乱する様を描く。騎乗する五人すべてが弓を持っている。第六図は、羅生門に棲む鬼神が現れて綱と対峙する場面。黒雲から鬼神が現れ、綱は印の高札を左手に持ち鬼神を睨み付けている。高札には文字が書かれている。画面右には、黒雲がかかった桜の木が描かれている。第七図は、綱が羅生門の壇上に上がり鬼神と格闘している場面。本文「きしんをのれかちからにひかれて大ほくをたをすことくにあをのけにとうとたふれけりをきあからんとしける所をつなとんてかゝりおさへてくひをかゝむとしければものゝかすともせすしてつなかかうへをつかんでらしやうものなかはまであかりける」に相当する。第八図は、頼光と、渡辺綱たち一行が、鬼神の腕を持ち帰る途中で、鬼神が現れた場面。

## (二) 下巻の挿絵(第九〜十六図)の構図

第九図は、綱が頼光から鬚切の太刀をたまわり、大和国宇田の郡に棲む鬼神を退治しに行く場面。第十図は、女房の姿に身を変えた綱が、若い女房に変化した鬼神と出会う場面。画面右が綱、左が鬼神。本文に、「かたちを女にかへてたはかるへしとおもひうすけしやうにまゆふとくはかせくろくたけのかつらををかけ白きかつき」の姿となった綱と、「はたちはかりの女はうの見めかたちのゆふなる」さまに変化した鬼神、と語られている条である。第十一図は、鬚切の太刀を抜いた綱が、正体を現した鬼神と立ち向かった場面。黒雲の中に腕を切り取られた鬼神が描かれている。綱は、甲冑に身を固めて鬚切の太刀を右肩に担ぐようにし、左手には切り取った鬼神の右手の腕を持っている。第十二図は、綱が切り取った鬼神の腕を頼光に差し出した場面。頼光は、鬼神退治の子細を綱から聞いて鬼神の腕を受け取り、病が治ることになる。頼光はまだ油断ができないと思ひ天文の博士に吉凶を占わせ、「鬼の手を朱塗りの唐櫃」に入れ、七日間の仁王経を講じる。左手前に鬚切の太刀を持つ童、四天王が部屋内に二人、廊下に二人と描かれている。第十三図は、物忌み六日目に、綱の母に変化した鬼神が、頼光邸を訪ねてきた場面。綱(図では「綱」と思われるが、本文では「頼光」)が門の内側で、変化した鬼神を迎えようとしている。鬼神は侍女三人、従者三人とともに門を入ろうとしている。第十四図は、綱(図では「綱」と思われるが、本文では「頼光」)が、綱の母に変化した鬼神と語り合う場面。鬼神が今生の思い出に「鬼の手」を見せてほしいと頼み、この後、鬼神が本性を現し、切り取られた腕を取り戻そうとする。第十五図は、綱が鬼神の首を切り落とした場面。本文では、「つなをつかんで御てんのはふをけやふつて出んとすころへたりといふままにそはなるたちをひんぬいてきりはらへければおにのかうへをうちおとしけれ」と、綱が鬼神の首を切り落としたと語られている。第十六図は、鬼神を退治した後、頼光邸で催された宴席の場面。大江山や羅生門に棲む鬼神を退治した頼光が、「きしんをしたかへける心のうちこそためしすくな



きしたいなれ」と、武門の頭領としての武力の偉大さを賞賛されて、物語は終焉する。

### 三、國學院大學図書館所蔵『羅生門』詞書の書写者

國學院大學図書館には『羅生門』と同時代に制作されたとされる絵入り物語が複数収蔵されている。『舟のりとく』『呉越絵』『張良』である。これらの作品に共通するのは、参考として掲出したように、詞書の「それ」「國」「人」「乃」「代」「あ」などの崩し方、漢字の振り仮名をはじめ、料紙も、下絵も同一である。『羅生門』と、『呉越絵』『舟のりとく』『張良』は、寛文・延宝期に同一の詞書書写者・同一絵草紙屋による作品なのではないだろうか。

石川透氏は江戸時代の前期の詞書書写者を具体的に指摘されている<sup>6)</sup>。中でも、國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻の詞書書写者について、奈良本絵巻『武家繁昌』は浅井了意であること、武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本の『竹取物語絵巻』の詞書書写者が『呉越絵』『舟のりとく』『張良』と同一であること、奈良絵本『住吉物語』（三冊本）は、朝倉重賢の筆であること、などである。また、『住吉物語』（三冊本）の各冊の末尾にある、陰刻「源小泉 大和極」、陽刻「烏丸通櫻馬場町 御繪雙屋 大和小泉」という印記<sup>7)</sup>に注目されて、この印記が、ボストン美術館所蔵『天狗の内裏』、フリーア美術館所蔵『玉藻の草子』などにもあり、朝倉重賢の手になるものの一つの特徴であると指摘されている。なお、『羅生門』の諸本の中で、国文学研究資料館所蔵本・京都国立博物館所蔵本・天理大学附属図書館所蔵本・滋賀県大通寺所蔵本なども朝倉重賢筆とされている<sup>8)</sup>。

江戸時代前期に、「大和小泉」のような絵草子屋が京都に存在し、その中の絵草紙屋が國學院大學所蔵の『羅生門』をはじめ、『呉越絵』『舟のりとく』『張良』などの新作の物語絵巻を制作し、同一の詞書書写者に依頼していたと思

量されるのである。<sup>(9)</sup>

注

(1) 佛敎大学図書館所蔵の翻刻には、古川千佳氏「新資料紹介 御伽草子『羅生門』」(常照—佛敎大学図書館報 第53号「平成十七年三月」)が、井田等氏所蔵本の翻刻には、「横山重 松本隆信編 室町時代物語大成」第十三号 角川書店 昭和六十年)が、国文学研究資料館所蔵本の翻刻には、辻英子氏「国文学研究資料館蔵『羅生門物語』」(在外日本絵巻の研究と資料)五〇五〜五三一頁 笠間書院 平成十一年)が、東洋大学図書館所蔵『羅生門』(絵巻二軸)の翻刻には、『続御伽草子』岩波文庫 六二〜八二頁)がある。本稿をなすにあたって、上記の御論を参考にした。

(2) 辻英子氏は前掲書注(1)にて、国文学研究資料館本は「諸本の中で近似性が高いのは東洋大学図書館本である」(五〇六頁)、また、「国資本は東洋大本と別表現をとる箇所も見られ、また、次掲のように後者に比し表現は詳しくなっているのが特徴といえよう。『そのころ宮こに人のうする事ありて、大しんくやうのひめ君ともいはす』(国資本第1紙11・12行、東洋本点線部分ナシ。以下同)、『みめかたちのいつくしき女はうなれは行くゑもしらすうせて(見えざるにけるとて)うれへにしつむたかきいやしきによらす(者)おほかりける』(上第1紙14行・同第2紙1〜3行)』(五三〇頁)とも述べられている。

(3) 佐々木紀一氏は、東京国立博物館所蔵『綱絵巻』と、『羅生門』とを比較され、『綱絵巻』十三図ある中の、後半の第十・十一・十二・十三紙は、『羅生門』の絵に一致する部分があると論じられている(『国語国文』第七十三・四、二〇〇四年四月)。國學院大学図書館所蔵本以外の『羅生門』の絵及び類似の絵草紙・絵巻物の図との比較については、今後の課題としたい。

(4) 『羅生門』の当該場面の本文は、「すてに六日になりにけりわたなへのは、御せんかはちの國たかやすのさとにおはしけるかしのひてみやこにのほりつなのもんくわいにたちよりかほとくとた、き給ふいかなる人やらんとたつねさせければかはちより母かまいりたるのたまふこのよしかくと申ければらくわうきこしめし人しては母はらのあしきさま

にこゝろへ給ふこともありなんとてみつからもんのきはまてたち出て」とあるように、河内国高安里から訪ねてきたのは、綱の母親であり、それを迎えたのは、頼光である。國學院大學図書館所蔵『羅生門』の画面上で、迎えたのは綱であり、母に化身した鬼と相對峙しているのも綱である。また、『太平記』の当該場面の本文は、「綱この手を取りて頼光に奉る。これを朱の唐櫃に収めて置かれける間、占夢の博士に問ひ玉ひければ、七日が間の重き御慎みとぞ占ひ申しける。これによつて、頼光堅く門を閉ぢて、七重に木々綿を引き、四方の門に十二人の番衆をすゑて、夜ごとに殿居裏目をぞ射させける。物忌七日に満じける夜、河内国高安より、頼光の母儀とて門をぞ敲かせける。物忌の最中なれども、老母の対面のためとて遙かに来たり玉へばとて、力なく、門を開き、内へ誘ひ入れ奉つて、珍物を調べ、酒を勧め、様々の物語どもに及びける時、頼光いたく飲み酔ひて、この事をぞ語り出だされける」(小学館新日本古典文学全集『太平記』卷第三十二「鬼丸鬼切の事」六一―二頁)と語られているように、河内国高安から訪ねて来たのは、頼光の母であり、迎え入れたのも頼光である。頼光は、遠方から老母が来たので、やむなく、門を開けて邸内に入れて、歓待した。最後には頼光自身が酔つてしまい、事の次第を語り出してしまふのである。一方、『平家物語』(百二十句本)の当該場面の本文には、「これを持参しければ、頼光おどろき給ひて、播磨なる晴明を呼びて問はれければ、『綱には七日のいとま賜つて、仁王経を講読すべし』とぞ申しける。第六日になる夜、門をたたく者あり。『たれ』と問へば、『綱が養母、渡辺よりのぼりたる』とこたふ。この養母と申すは、綱がためには伯母なり。『人してはあしかりなん』とて、綱たち寄りて言ひけるは、『七日の物忌にて候へば、いづくにも一夜の宿を借り給ひて、明日に入らせ給ふべし』と言へば、母さめざめと泣き、『生まれしよりあらし風にもあてず、人だてし甲斐ありて、頼光の御内に『箕田源四』とだに言ひつれば、肩を並ぶる者なし。うれしきにつけても、恋しとのみ思へば、このごろはひとしほ夢見心もとなくてのぼりたるに、門をさへひらかざりし。かかる不孝の咎なれば、神明もまぼり給はじ。七日の祈請よしなし。今よりは子ともたのむべからず。親と思ふなよ』とかきくとき言ひければ、綱は道理にせめられて、『たとひ身はいかになるとも』とて、門をひらき入れてけり。」(新潮日本古典文学集成『平家物語』卷第十一「第百八句 剣の卷下」二七七―八頁)とあるように、渡辺から訪ねてきたのは、綱の養母(伯母)であり、それを迎えたのは、綱である。綱は、養母に「不孝」者、「親と思ふなよ」とまでなじられて、門を開けて養母を邸内に入れたのである。『羅生門』と、『太平記』『平家物語』、それぞれの作品により、頼光と綱とが錯綜していることが、『羅生門』絵巻の絵師の錯誤のもととなつているのか、それとも『羅生

「門」を書写する際や新作として執筆した際などの生成過程によるものなのかは、不明である。もちろん、「羅生門」が、「平家物語」「剣巻」をもとに、「太平記」三十二を参考にして構成されたという成立論的な考え方（川崎剛志氏執筆「羅生門」『御伽草子事典』四八〇～四八一頁 東京堂書店二〇〇二年）も首肯される。

(5) 『羅生門』の当該場面の本文は、「其後このくびまひさかりくわえんをふきてかゝりけるつなちつともさはかす太刀ふりあけてきりはらふつるにたちのきつき五寸はかりくひをつてくちにふくみながらはんじはかりをとりあかりていかりけるつなはこしのさしそへするりとぬきすきまもなくきり給へは大地にをちてつるにむなしくなる」と、鬼の首が切りられ、大地に落ちて骸となったことが臨場感をもつて語られている。語られた「鬼の首」と絵画された「鬼の首」の比較は、絵画史の問題なのか、「鬼」の享受史の問題なのか、興味深い。なお、國學院大學図書館所蔵の古典籍にいくつかの「鬼の首」の図があるので、参考のために掲げた。上段の図は、『羅生門』上巻第七図。中段の図は、『酒吞童子絵貼交屏風』（二曲一雙、縦一四七糎、横一四八糎、全二〇図、各図の寸法は縦一七・五糎、横二五糎、もとは横本袋綴冊子本か、江戸時代前期写）の一図。画面中央に切られた首が描かれている。下段の図は、『田村の草子』（四つ目袋綴の三冊本、縦二九・六糎、横一八・四糎。図は各冊に九図、江戸時代前期写）の下冊の第七図。『酒吞童子絵』と同じく、画面中央に鬼の首が描かれている。なお、本「田村の草子」の翻刻と解題は、山本岳史氏により本誌「國學院大學 校史・学術資産研究 第四号」國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二四年三月）に掲載されている。

(6) 石川透氏「第四編 太平記絵巻奈良絵本・絵巻類 第三章 太平記絵巻・絵本の制作」(『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店 二〇〇三年)。なお、石川透氏は、國學院大學図書館所蔵『竹取物語絵巻』二点(武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本)の詞書書写者が、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』、アイルランド国CBL所蔵『俵藤太物語』『舞の本絵巻』、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語絵巻』などとも同じであると論究されている(國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻)。(針本正行編『物語絵の世界』七七～八六頁 二〇一〇年)。

(7) 針本正行は、國學院大學図書館所蔵の「住吉物語絵巻」・奈良絵本「住吉物語」(二冊本、一冊本、三冊本)の四点の本文及び挿絵の特徴を紹介し、中でも三冊本の各冊の末尾の印記「大和小泉」を確認した(國學院大學所蔵の絵入り物語)。(『中古文学 第八十六号』平成二十二年十二月)。

(8) 「第三編 朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類」(「奈良絵本・絵巻の生成」二〇九～二二八頁 三弥井書店 二〇〇三年)。

国文学研究資料館所蔵「羅生門物語」の詞書書写者は朝倉重賢であり、國學院大學図書館所蔵及び佛教大学図書館所蔵「羅生門」のそれが、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵「太平記絵巻」などの詞書書写者と同一と仮定すると、本文の近似性とは一致しなくなる。書写者と、書写する際に用いた本文がどのような関係にあるのか、寛文・延宝期の物語絵巻の生成過程とどのように関わっているのかについても、今後の課題としたい。

(9) 國學院大學図書館所蔵「呉越絵」の絵師、成立時期については、「呉越絵」の納められている箱の内側に「呉越ものがたり 傳 狩野長信筆」とある。伝承筆者の狩野長信は、江戸時代初期の狩野派の絵師として、寛永期に活躍したようである。「呉越絵」の絵師とすると、やや時期が早く、「呉越絵」の絵師と特定することはできない。しかし、「略」「舟のりとく」上巻第二図(貨狄と揚基が校訂に拝謁する場面)・第三図(蚩尤軍が貨狄・揚基軍と合戦する場面)と、「呉越絵」上巻第二図(呉王夫差が臣下と謁見している場面)・第三図(呉王軍と越王軍とが合戦している場面)は、それぞれの絵巻の挿絵を交換しても問題にならない程に酷似した構図及び人物の造型方法とが同一である(針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵「呉越絵」と解題と翻刻」(「國學院大學 校史・学術資産研究 第三号」國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二三年三月)と述べたことがある。なお、國學院大學図書館所蔵「舟のりとく」の翻刻は、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵「舟のりとく」と解題と翻刻」(「國學院大學 校史・学術資産研究 第二号」國學院大學研究開発推進機構 國學院大學 校史・学術資産研究センター 平成二二年三月)にある。

國學院大學図書館所蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、館員の方々に多大なご配慮をいただいた。ここに感謝申し上げる。



《國學院大學所藏物語繪卷・繪草子の「鬼」》

「羅生門」下巻第七図



酒吞童子絵貼交屏風



奈良絵本「田村の草子」



## 羅生門 翻刻

## 上卷

そもく／＼にんわう五十六代のみかど  
 清和天皇の御まこたゞのまんぢうと  
 申ハちからハ世に聞えきりやうたく  
 ましくしてぶようのきこえあり  
 ければ日本武士のずい一なりとて  
 はしめてげんじのしやうを給ハリ  
 くに／＼のぢらんをしつめ給ふかその  
 御子つのかミよりミつあとをつき  
 はんしやうしたまふときにあたりて  
 ミやこにふしきなる事共あり  
 大しんくきやうの御むすめ土民百姓  
 のむすめをきらハすみめかたちのい  
 つくしきはいつくともなく見えず

うせけるとてうれへにしつむものお  
 ほかりけりはしめひとりふたりの  
 ほとハわりなく人にそゝなはされける  
 にやあるひハおやのいさめもうとまし  
 くかくれうせぬとおもひしかこゝにも  
 見えすかしこにもうせぬといふほと  
 こそあれすてに洛中に百余人に  
 をよへりこれたゝ事にあらずとて  
 かミ一人よりしもばんミンにいたるま  
 てわか身ひとりのなけきとなれり  
 いかさまこれハ人のしはさにあらずとて  
 陰陽のはかせをめしてうらなはせ  
 給ふ所にうらかたのおもてかんもんをもつ  
 ていはく都のにし丹波の國より  
 わさハひをなすつゐにハ世をかたふ  
 け王位をおかさんとするよしかん  
 かへければいかゝしてかれらをほろ  
 ぼさんと公卿せんぎありけるにとか



くせつ津のかみみなもとの頼光ちいくハウを  
 めしてかれに仰てたいぢあれかし  
 とそもん申されければみかどけに  
 もとおほしめしすなハちいそきらい  
 くハうをめしてせんしをなし下されける

(第一回)

頼光ちよくめいにしたかひやすくと  
 御うけ申しゆくしよへ帰りさふらひ  
 たちをちかつけわれふしきのちよく  
 めいをかうむりたんはの國大え山  
 のきしんのうつてにむかふなり我と  
 おもはん人々ハともしてたへとのたま  
 へはつはものおほしと申せともつ  
 なきんときさたみつすゑたけとて  
 四てんわうと聞えし人に藤原ふぢハラのほう  
 しやうを一人くはへ以上六人の人々山ふ

しのすかたに御身をかへ大江山にし  
 のひいりさしもつうりきひきやうの  
 おにともの七十五きか首くびをとりこゝ  
 かしこにてとられし女ばう共をミ  
 なくめしつれてかへらせ給ふかまこ  
 とにこれわうめいおもくしてせんじ  
 におそれきしんほろひけるといひ  
 なから人くの手からのほと人間のわさ  
 とハ見えさりけりさてこそ天下し  
 つまりてはんミンよろこひけるとなり  
 これ頼光の武勇ぶゆうすくれたるによりて  
 なりとてすなハちくハんゑをこえあ  
 またしよりやうを給はりいよく名た  
 かく聞えける扱又ある夜のつれくにな  
 らいくハうは五人の人々をよひあつめ  
 うたひさかもりしたまひてたかひに  
 遊興ゆけいありけるおりふし爰かしこの  
 物かたりありけるにほうしやう申けるハ

扱も大江山のきしんをたいらけ世も  
 しつまりぬされともうちもらしつる  
 そのけんそくの鬼東寺おにとうじのらしやうもん  
 にすみてさるのこくより九てうあた  
 り八人のかよひもたやすからすとう  
 けたまハるめんくハしろしめさす  
 やとかたりけり人々これを聞給ひい  
 かさまさやうの事のあるへしゆゝし  
 きてんかのわさはひなりと

をとろき給ひ

(第二回)

つなこのよしをきゝこれはほうしやう  
 の物かたりともおほえす國をへだて  
 ていつれの所にきしんのすむなとゝい  
 はゝまことゝもおもふへしすてに東  
 寺のらしやうもんハわうじやうなんもんの南門な

れはいかにとしてきじんのすむべき  
 そやたとへすめばとてわれくかく  
 てあるうへハすませてをくべきかそう  
 じてほうしやうハその身の上はうな  
 るまゝに京わらんべのくちずさひを  
 まことゝおもひ御まへにての物かたりハ  
 はゞかりおほくおぼえたりそのうへこの  
 つはものとも大江山のきじんをうち  
 もらしぬるなど(ママ)いはゞかつうハちぢよく  
 のいたりなりよそにての聞えもむ  
 ねんなるへしとさんぐにあつこう申  
 されけれハほうしやうよしなき事を  
 かたりいたしめんぼくなげにて色を  
 そんじいかにそれかしもたしかに  
 しりたると申さハこそ人のかたれハきゝ  
 つたへさしきのけうに申つれしよせん  
 御身と爰にてあらそひ申ともまこ  
 といつはりハしりかたしさほとにふし

きにあるならハこよひにてもかのらしや  
 うもんへゆるあるかな(ママ)きかを見たまへ  
 見たるものこそせうこなれそれかしあ  
 しき物かたりして御まへのけうをさまし  
 申事御めんあれとてからくとわらハ  
 れけるつなこのよしをきくよりあら  
 ことくしのほうしやうのいひやうかな  
 さてハそれかしらしやうもんへえまいる  
 ましきとおもひ給へるかやたとひつく  
 しのはてなりともきしんあるとたに  
 いふならハ一人はせむかつてたいじせん  
 に何のおそれかあるへきそやまして  
 これほとこの事にこゝろをハ見られしと  
 さしきをたゝむと見えけれハ頼光き  
 こしめししはらくしつまり候へまこと  
 にきしんすむならハつゐにハかくれハ  
 有ましきとおほせける其時めんく  
 とうしんして心しつかにたいちせん

あはてゝミゆるつはものごとゝめ給へ  
 ともつなもとより心はやきおのこに  
 ていやくほうしやうにたいしいこん  
 はなけれどもひとつハ君の御ため又ハ  
 てんかのあさけりなりとてひそかに  
 一人しのひゆきまこといつはりをミて  
 まいらんと申されけるもしきじんすん  
 てそれかしにわたりあひて手にあま  
 るほとならハかさねてせんじをたいし  
 て御むかひあるへきなりおなしくハ  
 するしの札ふたを給はりてまいりたる  
 せうこにらしやうもんにたてをくへき  
 とおもひきつたるありさまなり頼  
 光ちからをよはせ給ハすその義ならば  
 するしのふたをえさすべしあひかま  
 へてふかくしたまふなよそなから門もん  
 の有さまを見てかへれとそのたまひ  
 けるつなはするしの札をたまはり

さしきをたちて人々におにのすむ  
 ならばやかてくひとりてさかなにま  
 いらせんもしうちもらしなは二たひ  
 かた／＼におもてをむくへき事あらし  
 といひすてゝいそぎ

しゆくしよに

かへりけり

(第三回)

ひとま所にさつといり十もんしうつ  
 たるからうとのふたをあけひをとしの  
 よろひにおなしけの五まいかふとの  
 ををしめらいくハうよりあつけ下され  
 たるひさまるといふたちをもちたゝ一  
 人ひさうせしれんせんあしけの馬に  
 きんふくりんのくらをゝきゆらりと  
 うちのり一むちあてゝみれはこのころ

かひにかふたる馬なればむちにおとろ  
 きひろき大にはにをとり出しりこみ  
 してそはねまはりけるらうとう共  
 めをさましこれハ夜うちやいりたるらん  
 とてたちなきなたのさやはつしな  
 に事やらんとひしめきけりつなこゝ  
 糸になりていひけるハあはてたるも  
 のともかなたちもかたなもさやにを  
 さめよわれたゝいま御まへにてふしき  
 のさうろんしてとうしのらしやうもん  
 へゆきおにのすかたをミるへきなり  
 人あまたにてかなふましミなくこれ  
 にまち侍れとてこまのたつなをかい  
 くつておもてをさして出にけりらう  
 とうともこれをきゝ扱もゆゝしき  
 御大事かなたとへハはんくわい長りやう  
 ほとのはもの千き万きこもるとも  
 人ならばおそれ給ハしきしんハつう

りきしさいのものなれはいかにもわか

ミをへんしてうたるましこのたひ

の御せんとなれは御とも申へきといひけ

れはつなこのよし聞給ひよしなき

人々のいひ事かな御まへのこうろんに

をよふ身のたとひみちんにくたかるゝ

ともいたむへきにあらす人あまたくし

てゆくならば後のあさけりもむねん

なるへし其うへ今度大江山のきじん

を見るにちゑあそうしてたはかり

やすしせんき万きありとてもた

ちのかねのうたれんほとハきりとるへし

わかいきほひをしるならはいかなるき

しんなりともいつへきとハおほえす

ときうつりてハあしかりなんといいひすて

てとねりもつれすたゝ一人しゆくしよ

を出て二条大宮をみなミかしらにあゆま

せゆくすてに九てうあたりまでしづ

くゆきけるかにはかに雨ふりくる

雲おほひいまゝてさやかなる月も

かきくもりしんやのことしゆくへきさ

きもしらすかへるへきみちもわすれて

せんこもさらにみえさり

けり

(第四回)

されともてんかふさうのかうのものなり

ければいかてか見さるへきといかつちの

ひゝきをしるへにていなひかりをた

いまつとして心しつかにそうちよせける

さるほとに頼光ハのこる人くとしゆえん

してまち給ふかいかさまこの雨のふり

やう又いかつちのひゝきわたるハつなか

らしやうもんへゆきてきしんになやま

されぬるとおほえたりこのありさま

をしりなからこゝにてまたんもこゝろ  
 もとなしいさやわたなべにちからをそへ  
 てとらせんとてさしきをたち給へは  
 もつともしかるへき御ちやうとてめんく  
 しゆくしよへかへりおもひくゝのよろひ  
 きてよりみつとのをさきにたてこま  
 にむちをうちそへて手にくゝ大たいま  
 つともしてミちくゝ時のこゑをつくり  
 これも大ミやをくたり八てうのぼうもん  
 まてゆき給ふところにはかになま  
 くさき風ふきて雨しやぢくのことくふ  
 りけれはたいまつ一度にきえて前ぜん  
 後ごもさらに見えさりけりさしも大  
 かうの人々も雨かせにもまれてこ  
 とはをかはず事も聞えずして  
 わたなへをみつぐべき事ハわすれ  
 はてゝたゝわれ一人かshintたいこゝに  
 ありと五人のひとくゝハこまのかし

らをならへていかゝせんとそさゝやき  
 けるまことにこれハ大江山にてうちもらし  
 たるきしんかわさなるへしものゝこゝ  
 ろをさとりてその身ハこくうにかく  
 れるて雨風のまきれにひとりくゝ  
 とらんとおもふしよいなるへしめんく  
 ゆたんしたまふなよいまははやゆく  
 へきはうかくおほえすこゝにて夜の  
 あけんをまつへきなりむさんやつな  
 はおにゝとられん事こそむさんなれ  
 とてむなしくときをうつし

給ふ

(第五図)

かくてつなハかやうに人々のうしろつめし  
 ておはしますとハ夢にもしらすこま  
 にむちうちこゑをそへてかけまはり

けれどもさしもの名馬めいばと申なから身  
 ふるひしいなゝきて一むちうてハやう  
 〱二時あまりにみち三町かほとは  
 せつきてはるかに見あけてこまを  
 ひかへこゝろをしつめてくハんねんし  
 けるかなむや八まん大ほさつ百わうち  
 むじゆのしんとしてかたしけなくも  
 おとこ山にあとをたれ給ひぬしかるに  
 まのあたりにてきしんすみ人をな  
 やますをしやうらんあらずやわれに  
 ちからをそへてきしんのすかたを見  
 せしめ給へとたなこゝろをあはせて  
 きせいしてめをひらき見てあれ  
 はらしやうもんのうちにくろ雲たな  
 ひき雲のうちよりひかりたちてせん  
 まんのいかつちなりわたりていまは  
 いげうのものまなこにさへぎりて  
 見えにけりいかにきしんまさにきけ

わうしやうまちかき所にすんでゆき  
 きの人をなやますとも我が手なみを  
 きゝをよふへきはや〱すかたを  
 あらハしわれとせうふをけつせよとて  
 たんしやうにとひあかりいきほひはらつ  
 てまちかけたりきしんこのよし見  
 るよりもすこしおそれてちかづかす  
 やゝありてから〱とうちわらひ雲  
 のうちよりいひけるハなんちハよりミつ  
 かうちに聞えたるわたなへのげん五つ  
 などいふかうの者かや先年たんは  
 の國大江山にてうちもらされそのうら  
 ミをさんせんかそのためいま此所  
 にすみしなりなんち一人をとゝめん  
 事ものゝかすともおほえぬなりなん  
 ちかしうの頼光をとりしたかへおに  
 とものけうやうにほうせんとつね〱  
 うかゝひまつところにはや〱歸りて頼

光にかたりつゝつれてきたれとよはゝり

けり

(第六回)

つなこのよし聞て一人たにもとゝめ  
えぬ身にて何ほどの事のあるへき  
そ我なんちかすかたミんために人く  
とさうろんしてこの所に來りたり  
のちのせうこにはなんちたちてく  
れよいとま申とてらしやうもんに立  
より石たんにしるしの札をたてをき  
またこそけんさんにいるへしとて馬  
のはなをひきむけてむちにあふミ  
をあはせハやかへらんしたりけるうし  
ろよりらしやうもんくつれかゝるとお  
もひければそのたけ二丈はかりなる  
きしんなかき手をさしのへてひた

りの手にてつなかがふとのてへん  
をつかミ右の手にて馬の尾おをくる  
くくとまとひてなんちいつくへかえる  
そしはらくといふまゝにとつてな  
けんとしけれとももとよりつなは  
大ちからのかうのものなれハすこし  
もさはかすこゝろへたりとてひさま  
るをするりとぬきふりあけきしん  
をきらんとしけれ共大はんしやくに  
おさるゝことくにてはたらくへきや  
うもなかりけりむさんやつなハこゝ  
ろハたけくましませともみかたのつ  
はものもなかりけれハすてにき  
しんにひつたてられ馬もろともに  
とりひしかれいまはさいことおも  
ひけるかつなしあんして甲のしの  
ひのをゝきつてはなちもちたるた  
ちにて馬のをゝきつてすてけれ



はきしんをのれかちからにひかれて  
 大ほくをたをすことくにあをのけ  
 にとうとたふれけりをきあからんと  
 しける所をつなとんてかゝりおさへ  
 てくひをかゝむとしけれハものゝか  
 すともせずしてつなかかうへをつ  
 かんてらしやうもんのなかはまて  
 あかりけるをさけられなからハラひ  
 きりにそきつたりけるきしんかみ  
 きの手をひちのかゝりよりふつつ  
 ときりをとしけれハラしやうもん  
 の二かいよりつなハマつさかさまに  
 そをちにける石だんにてかうべを  
 つきそんしめくれ心もきえけれと  
 もしはしいきをつきけれは人こゝ  
 ちつき四はうを見まはしけれは  
 よはほのくくとあけにけりつなハ  
 馬にはなれてかちたちにて

ばうぜんとしてゐたり

ける

(第七回)

頼光をはしめ五人の人々はせ来り  
 たまひいかにくとのたまへハつなハ  
 いよくちからをえて人々とうちつ  
 れてたかひに物かたりしてきつた  
 るおにの手をもちてよろこひいさ  
 みてかへるところに又にはかにく  
 もりしんやのことくに成にけり人々  
 きもをひやしけれハラいてんおちかゝ  
 りきりたるおにの手をうはひと  
 つてそあかりけるむねんたくひは  
 なかりけりされともつなの

てからのほとハ

あらはれほうしやうの

いひしこといつはり

にてあらさると

しよにんの

ふしんも

はれにけり

(第八回)

下巻

つなハきじんをうちもらしぬる

ことをむねんにおもひ其後よなく

らしやうもんへゆきてうかゞひけれ共

あへてまなこにさへきるものもなし

ゆきゝのみちもたやすくなりて

きじんハはやほろびにけりとて

ばんミンあむどのおもひをなしに

けりそれよりもひぎ丸といふ太刀の

名をあらためておにきり丸とそ

申けるおなしき年の夏のころ

頼光らいくわうきやへいにをかされてしんく

とこしなへにならんとし給ひけり

醫師いしくすりをあたへけんしやかぢ

すれとも更さらにそのしるしもなし

ときく物くるハしき事のミのた

まひけるこれハたゝことにあらしこゝ

かしこにてしたかへしきしんのを

わりやうともいま頼光の御身に

せまり給ふかやいかさま大事成

へしと人々おそれあひけるところに

あるものきたりて申けるはやま

との國うだのこほりに大きなるも

りありこのもりにきしんすんて

人をなやまし牛馬をとりくら

ひけると申なりこれたにしたかへ

たまハゝおにのけんそくたえて

あくりやうもしりそきはんへらんと申ければらくはう聞しめしさてハよなく廿日あまりやはんにをとろかしけるよとむねんにおほしつなをめて仰けるハなんぢやまどの國にゆきてきしんをしたかへてわかなふらんをやすめ候へとのたまへハうけたまはり候とていと心やすくりやうちやう申ける頼光らいくわううれしくおほしめし家のたからたまはりけるそのちつなハしゆくしよにかへりて夜にまきれかのもりにゆきこゝかしこをたつねけれとも人のしゝむらはつこつみちくゝてありけれともきしんのすかたハ見えさりけりこかけにたちかくれ物をすましてきゝければうしのいきさしのことく

にうめきけるこゑまちかくきこえ  
 けれともつなかあたりにも

ちかつかすまして

なやますものも

なかりけりさるほどに

つなハかのもりに

三日三夜まちけれ共

何のしるしも

なかり

けり

(第九回)

つなハくちおしき次第なりわれ  
 どゝのかうミやうをきはめ天下に  
 あらハし此たひも四てんわうの其  
 第一にえらハれはるゝこれまで  
 くだりておにのすみかをたつねい

たししたかへすしてかへりなは

ひころのかうミやうむにならんそのう

へしよ人のあさけりのかれかたし

又はうはいのおもはんところむねん

なりいかゝたはからんとて又ミやこに

かへりつくくゝとあんしけるかもとよ

り我てからたひくゝにをよひけれハ

きしんおそれてちかつかすとおほへ

たりかたちを女にかへてたはかるへし

とおもひうすけしやうにまゆふとくは

かせかねくろくつけたけのかつらを

かけしろきかつきして又たそかれ

ときにかのもりのあたりをみちに

ふミまよひたるけしきにてたと

ろくゝとあゆミけりかゝるところに

はたちハかりの女はうの見めかたち

ゆふなるかハるかににしかいだうより

きたりていひけるハ御身はいかなる

人にておはしますそこれハ宇だ

のこほりのもりとておそろしき

おにのすみけるなりみちにふミま

よひ給ハゝわれらかやとにて夜を

あかし夜あけていつくへもわたらせ

たまへといひけれはつなハこれをき

きてこれこそまことのおにへんけ

て我をたはかりけるよとおもひす

てにかたなのつかに手をかけてぬ

きうちにせんとおもひしかいやく

もしまたさもなきものをきるなら

はふかくの名をとるへきとしあんし

て女ばうのそばへよりうれしくも

とひ給ふものかなわれハミよしのゝ

ものにて候かうだのこほりにしる人

ありてたつねまいり候ひけるかみ

ちにふミまよひて候かゝるおそろし

き所にきたりて候扱も御身ハこゝ

もとにてハ見なれぬ御すかたあり  
 さまにてありいかなる人にてまし  
 くけることはをやハラけてとひ  
 ければいまはなにをかつゝむへきさ  
 きに一てもとりはしを夜ふけ  
 てとをりければうつくしき上らう  
 にゆきあひいつくへゆくそとかたら  
 ひよりてミちすから物かたりしける  
 かおほきまちはしつめにていさ  
 やわかやとへつれてゆかんとてかき  
 いたくとおもひしにせつなのあひた  
 にこのところへとひきたりミつからハ  
 見めかたちのうつくしきとてた  
 すけをきあさゆふおにゝめしつかハ  
 れうきめにあふことの

かなしきよとて涙を

なかしてかたり

ければ

(第十回)

さしものつなもたはかるとは思は  
 すあらいたハしの御事かなけにも  
 このもりにハおにのすむと人のいひ  
 つたへしハ扱ハいつはりならず御身  
 おにゝしたかひ給ハゝミつからをうだ  
 のこほりまてをくりてたひ給へ  
 うれしき人にあひけるものかなと  
 て手にてをくみて扱もそのきしん  
 はいかなるすかたにて候やおにの  
 こゝろにもなさけありて御身をた  
 すけをくこそやさしけれとみち  
 く物かたりしけるかかいだうちか  
 ちかといつるとおもひしになをもち  
 のうちふかくそ入にけるつな心にお  
 もふやううたかひなきおになりと

すこしもゆたんせすかたなのつ  
 かに手をかけていまや／＼とおもひ  
 けれどもこゝろならすたふらかされて  
 もりのうちを二三へんありくとお  
 もへはくろ雲さかりて風はけしく  
 なりて身のけよだつておほへける  
 かの女にはかにたけ二丈はかり成  
 うしおにとなつていさやわかやとへ  
 ともなひ申さんといふまゝにつなかう  
 へをつかんでちうにひつさけての  
 ほりけるつなハかねてよりしんし  
 たる事なれハひげきりをするり  
 とぬきこくうをはらつてきつたりけ  
 る雲のうちにあつといふこゑのこり  
 てすかたハ見えすなりにけりき  
 られたる手にてつなかうへを  
 ミちんになれとつかミけれ共つなあ  
 へていただきますおにの手もせいり

きつきてかうへにこそハとまりけ  
 るつなハまたおにをうちもらしやす  
 からすおもひてその夜ハもりにそあ  
 かしけるされともかさねて

きたるもの

もなし

(第十一回)

いまはこれまでなりとてきつたる  
 おにの手をとりて見れはうるしに  
 てぬりたることくにまつくろなる  
 毛おひ指ゆび三つある手なりいぜんの  
 ことくにうはれしとふどころに  
 おさめたちをまへにあてあたりの  
 さと人をよひいたしてしか／＼のよし  
 を申けれハ人々をとろき扱もてから  
 のほといまにはしめぬ御事なりと

てみちにてわざはひもやあらんす

らんとてやまとよりミヤこまで人々

にをくられて二てうの御しよへかへ

りけるありさまほめぬ人こそなかり

けるかくてらいくハウの御まへに参り

くたんのよしをくはしく申あげお

にの手を御めにかけられけれハらい

くハウよろこひ給ふことかきりなし

さてこそやまひもなをりけれなを

ゆたんすへきにあらすとててんむ

のはかせさつしよをひらきいちく申け

るハおにの手をいしのからうとに

いれいぬるのすみに蔵をたてこ

れにおさめかさりして七日のあひた

にんわうきやうをおこたらすよみた

まへと申けれハきやうをよませ給ひ

ける御てんの庭にはにハ一ときつゝかハリ

く十二人のとのゐ人をゝきひきめ

をいさせたまへとてふぢやうのものゝ

出入をかたくいませ給ひけり

(第十二回)

すてに六日になりけりわたなへ

のはゝ御せんかはちの國たかやすのき

とにおはしけるかしのひてミヤこに

のほりつなのもんくわいにたちより

かとほとくゝとたゝき給ふいかなる

人やらんとたつねさせけれはかはち

より母かまいりたるとのたまふこの

よしかくと申けれはらいくわう

きこしめし人してハ母はらのあし

きさまにこゝろへ給ふこともありなん

とてミつからもんのきはまてたち

出てたまくのおほしめしたち

て御のほりうれしく候へ共この

ほとさるしさい候て七日の物いみに

て候かけふハはや六日になり候あ

すはかりにて候へはいかなる事も

かなひ候ましこよひはいつくへも御

こし候て御すみ候へ夜あけ候ハ、けん

さんにいり申へしと申されければ

は、このよしをきこしめしさめく

とうちなきてちからをよはぬこと、

もなりさりなからわたのハ此ほと

やまひにをかされてそんめいふぢや

うと聞なれは老おひの身のかなしさハ

ねてもさめても御身のことのミお

もひくらしことにこの四五日ハうち

つ、き夢見もあしく候へはこん

しやうにてハ一たひ見えまいらせ

よみちをこ、ろやすくせんために

かはちよりはるく来るかひもなく

うちへたにいれすして夜あけてあ

はん事のうらめしさよ扱も御身は

いとけなきときよりもち、にすてら

れもりめのとたにつかさればミつから

かなしきことにおもひかたときもはな

れすあらし風にもあてしとそた

てかミほとけにもすゑはんしやうとい

のりしかはありてち、のあとをつ

きせつつかみ頼らいくはう光とてかくれなき

大しやうとなりあめかしたにおゐて

かたをならふる人もなしこれしかし

なから母かをんとくならずやこの四

五年かほとたかひにすかたをま

みえねはいかはかりこ、ろもとなく

おもひきりやうもすくれち、は、に

もにたるかほはせやらんとおもひ

あまりにゆかしく夜を日につ

きいそけとも女の身なれハかなは

す三日さきにかはちをたちりやう



の雲にのほることくうれしくお

しやうし

もひしにいかなるものゝ子とむまれ

給ひ

ておやのおもふほとおもはさる事の

けり

かなしさよなかいきすれはこそいつし

か子にたにもうとまれてもんのほと

りにたゝすむ命のほとのうらめし

(第十三回)

さよとてふしまろひてなき給ふは

それよりも酒さかなをとゝのへて

や／＼みつからをかいしてこのおもひ

はゝをなくさめ給ひける母はらいくハう

をはらしてたひ給へとこゑもおし

のすかたを上からしもへ見をろして

ますさけひ給へは頼光このよしき

扱もきりやうこつからしんしやうにひ

こしめしたうりなりことはりとて

としくなり給ふものかないまたあげ

門をひらきてけふまでの物いミ

まきのすかたをのミおもひ出くにの

をむなしくせんもいかゝとおもひあ

へたてゝすむ事もいかにゝを

すところ申つれ

こひしくおほすらんとおもふにつ

こなたへいらせ給へとて

けてものほりしに四五年見さる

うちふしておはします

そのうちにかやうにたくましくなり

はゝうへをかきいたき

給ふかやなのらすはいかてかわか子

さしきへ

とおもふへき人々うやまふもことハリ

にてはんへるそや御身をみるより  
 も父のことをおもひいたされてそゝろ  
 になみたをもよほすとてたもとを  
 かほにをしあてゝさめくゝとこそ  
 なかれけるらいくハうも涙をなかした  
 まひたまくゝあひ見るはゝうへの  
 おひをとろへて見え給へはなみたくミ  
 てのたまふこそ御ことはりにてまし  
 ませこの四五年のほどこゝかしこ  
 のうつてに仰せつけられて御ミヤ  
 つかひのいとまあらず候へハこゝろな  
 らすふかうのものとまかりなり候  
 そのうへ過にし夏のころよりきしん  
 のあくりやうにをかされ君もなや  
 み給ひしをミつからにおほせつけられ  
 しをやすくゝときしんをうしなひ  
 いまこの七日の物いみもさやうの事  
 にて候とむかしいまのことゝもかたり

たまへは母うへ此よしをきこしめし  
 扱もおそろしき事の給ふものかな  
 爰かしこをしたかへつるとハマこと  
 にてさふら(ママ)かやおにといふ物ハめいと  
 くハうせんのだひにてしゝたるとき  
 こそあふとハきけいまのめてたき  
 御よにきしん出て人をなやますこ  
 とのふしきさよそのつうりきしさい  
 のおにを御身のこゝろひとつにてした  
 かへ給ふかや御身をうミをとしむつき  
 のうちにてとりそたてしそのとき  
 はいつかはせめて五つになり竹馬  
 にむちうちて我にも見せよかしと  
 ねかひしにいつのまにか人にすくれ  
 きしんをかたきにうけてなんなく  
 したかへんとはいまもつておもはれ  
 すむかしをつたへきくにももろこし  
 のはんくわいちやうりやうハ千き万き

の人をもおそれずしたかへしと

こそきけめに見えぬ鬼をたはかり

うつ事ハにんけんとハいひかたしまし

てわか子とおもふへきひとへにかミほと

けともおかミたてまつるなり御身

を子にもちてわかのちの世もたの

もしくこそさふらへとて五つや三つの

ミとり子をあいすることくに頼光に

とりつきなき給ふよりミついと、むつ

ましくおもひまことにそれかしひとへ

にあさなゆふなのつとめにてもち、

のほたひとふらひたてまつりは、のはん

しやうをせんしうはんせいといのりさ

ふらへなにしにをろかにおもひたて

まつるへしとむかしをおもひ出てかの

なりひらの中しやうハ御ミやつかひの

ひまなかりしには、のこひしくおほし

めし中をかといふ所よりしはすの

つこもりかたにとみのことゝて御ふミ

ありなりひらなに事やらんとお

とろき給ふに哥あり

老ぬれはさらぬわかれのありといへは

いよく見まくほしき君かな

とあるを見てなりひらかきりなく

かなしくうちなきてやかて御返事

にかくなん

世の中にさらぬわかれのなくもかな

ちよもといのる人の子のため

とよみけんもわか身のうへにおもひ

いて、涙のはしとなりぬるとてな

きしつミ給へはものゝふのめにもなみた

のありけるハふしきなれた、おんあひ

(第十四回)

のみちほとあはれ成事よもあらし

とみなもろともになきにけりやう

く夜もあけなんとす母のたまふや

う七日のものいミをやふりわれにあひ

たまふこそうれしけれしかしなから

かうくの心なれはいかてかふつしん

もゆるし給ハさらんいまはいとま申

てかはちへ下るへし命つれなくさふら

は、又こそ参りてミ、<sup>(ママ)</sup>へ申へしとき

しきをたち給へは頼光も名こりを

しミ夜あけてかへらせ給へとてたもと

にすかり給へはまたさしきになをり

さてもそのおにの手といふものはいか

なるものにてはんへるそやミつから

一め見てこんしやうのおもひてともお

もふへしかはちへかへりて一もんにも

つたへわか子の手からのほとおひのなく

さみにも見まほしきとのたまふ頼

光このよしきこしめしやすきことに

て候へともかたくふうしこめてをき

候へは七日すきて御めにかくへしこ

よひハかなひ候ましと申されけるは、

きこしめしよし、それもことはり

なり見すともことのかくべきものな

らすやう、夜もあけぬれはいとま

申てかへるなりとてさもうらみかほ

に見えけれハ頼光ハたへかねてやがて

ふうしこめたるくらのうちよりおにの

手をとりいたしてこれ、御らん候へ

とて母のまへにそをき給ふは、これ

をつく、と見たまひてあらおそろし

や鬼の手といふ物ハかゝるものにて有ける

かや見るもいぶせくさふらふとてした

にをくかと思えけるかけにもこれハわか

手なれハとりてかへるとてミきの手に

さしつぐと見れはいま、ては、とみ

えし人のたけ二ぢやうはかりなるうし

おにとなつてつなをつかんで御てん  
のはふをけやふつて出んとすこゝろへ  
たりといふまゝにそはなるたちをひ

むぬいてきりはらひければ

おにのかうへうちを

としけれハむくろハ

はふをけやふつて

雲のうちへそ

いりに

ける

(第十五回)

其後このくびまひさかりくわえん  
をふきてかゝりけるつなちつともさは  
かす太刀ふりあけてきりはらふつ  
ゐにたちのきつさき五寸はかり  
くひをつてくちにふくミなからはんじ

はかりをとりあかりていかりけるつなハ

こしのさしそへするりとぬきすきまも

なくきり給へハ大地にをちてつゐにむ

なくくなるこれよりわたなへたうのやかた

にははふをせさると申すなり

そのゝちかのひけきりをあらため鬼き

りとそ名つけゝるされともきつさきの

をれぬれは何のやうにかたつへきとお

ほせけれともつるきのゐとくにて世

中しつかにおさまりける此つるきの

おれぬるにつきいかさましるしのな

からんやとてその比しゆけん第一の

聞えありしよかはのそうづかくれんを

しやうしたてまつり給ひてだんじやう

にこのたちをたてをきしめをひき

て七日のうちかぢし給ひけれハきつ

さき五寸をれたりけるつるきにてん

じやうよりくりからおりてきつさき口

にふくミつきければたちまちにもと  
のことく一ふりの太刀となるふしきな  
りし事ともなり扱このふたつのつる  
きけんしの家につたはりてうてき  
をほろほしなひかぬくき木もなかり  
けり扱もくにくのきしんもしつまり  
人のゆきゝのかよひしてとしくのミ  
つきものもはこふにわつらひもな  
くこくどのはんしやうひころにか  
はりめてたかりし御よとかやこ  
れらいくハウのふりやくもろこし  
にとつてこれをいはゝはんくわい  
ちやうりやうかいきほひにもこへ  
はんさうはんれいかはかり事に  
もすきまのあたりにたひく  
きしんをしたかへける心のうちこそ  
ためしすくなきしたいなれ